

# 大溝祭

## 曳山祭について

滋賀県には、山車を曳く祭がたくさんあります。おもな曳山祭は別表のとおりで、すでに、長浜曳山祭や大津祭はこのシリーズでも紹介されました。このほかにも、ほとんど知られていませんが、大字で1・2基の山車をもって祭のおりに曳くことがあります。

山車のことは俗にヤマとよび、曳山ともいいます。なぜヤマというのかはむずかしい問題ですが、わかりやすくいえば、山車のヤマは本来、松などがはえている自然の山のことをさしていたと思われまゝ。毎日仰ぎ見る山またはその頂上にはえている常緑の松の木は

祭のときに神が降臨する地、または依代よりしろとして信仰されてきました。一方、祭には人々をあとといわせる趣向が必要です。そこで自然の山を祭の中にとりこみ、不動の山を移動のできる山に変えることを思いついたと想像します。しかし、最初から車輪のついた山車はできないで、かついで移動させる昇山かきやまでした。昇山は人々がかついでいる時だけ動き、それ以外は、自然の山のように不動であるという性質をもっています。昇山は人々がかつげるだけの重量ですから、大きさに限度があります。そこで、昇山に車輪をつけ大型化したのが曳山です。曳山は誰でもどこへでも自由に



日吉神社に勢揃いした曳山

## 滋賀県内の曳山祭

	名 称	祭 日	氏 神	山車 の数	備 考
1	長 浜 曳 山 祭	4月13～16日	長浜八幡宮	12 <small>基</small>	国指定 <small>※1</small>
2	大 津 祭	10月9・10日	四 宮 社 社	13	県選択 <small>※1</small>
3	水 口 祭	4 月 20 日	水 口 社 社	16	〃
4	日 野 祭	5 月 2 ・ 3 日	馬見岡綿向 神 社	16	〃
5	上丹生の茶碗祭	3年毎の 4月3日	丹生神社	3	〃、余呉町
6	大 溝 祭	5月4・5日	日吉神社	5	町指定 <small>※1</small>
7	米原の曳山祭	5月9・10日	湯谷神社	3	
8	堅井の曳山祭	4月20日 <small>※2</small>	軽野神社	9	秦荘町
9	浅小井の祇園祭	7 月 14 日	今宮天満宮 神 社	6	近江八幡市

※1. 国指定、県選択、町指定はそれぞれ、国指定重要無形民俗文化財、  
県選択無形民俗文化財、高島町指定無形民俗文化財の略である。

※2. 昭和57年から4月20日に近い日曜日に行なわれている。

ひっぱりまわすことができます。現在、県内の祭ではこの曳山が使われているのです。だから、山車の上に松などの常緑樹がつけられているのは、もとの山の形をよく残しているといえるでしょう。

### 大溝について

大溝は現在、高島郡高島町勝野に含まれますが、江戸時代は分部氏の城下町として栄えてきました。明治のはじめ、打風・石垣と合併して勝野村となりました。その後の変遷については『滋賀県市町村沿革史』に詳しいです。『滋賀県物産誌』によりますと、明治初期の様子を、「大溝ハ古ヨリ英雄城ヲ築キシ地ナルガ、元和5年分部氏此地ニ封セラレ、伝テ明治4年廃藩ニ際シ、同氏東帰シ、後3年ヲ経、石垣・打風13村ヲ合セテ更ニ勝野村ト称セリ、其景況古昔ニ比スレハ今ヤ大ニ衰ヘタリ」とあり、また「北陸街道其中央ニアリテ道路概ネ平夷、百貨ノ流通自在、殊ニ沿湖ノ地ニ位スルヲ以テ水路亦運漕ノ便ヲ為シ、(中略)人口多クシテ田圃少ク、為メニ食料ハ供給ヲ他ニ仰ゲリ、実ニ本郡繁栄ノ地ニシテ商戸アリ、雑貨ヲ鬻キ郡邑ノ需用ニ供ス」

とあります。つまり、このあたりは、江戸時代から水陸の交通の便がよく、物資の流通も盛んで町として栄えてきたことがわかります。とくに都市的な性格は、人口が多いために食料を他所から供給してもらわなければならないことや、商家が多く高島郡内の需要にこたえていることが、そのことをよくあらわしています。しかし、明治になって大溝藩が廃止され、藩主も東京へ帰ってしまったため、昔のような盛況はすでになくなってしまったというのです。大溝が町であったことは、現在に残る古い町名や明治初期の勝野村の戸口からもわかります。江戸時代の町

には町人とよばれた商人や職人が住んでいますが、それは紙屋町・江戸屋町・職人町といった町名に残っています。『滋賀県物産誌』には480軒、2,215人(士族510人、平民1,705人)とあり、戸数の内訳は農156軒・工45軒・商107軒とあります(士族の戸数は、総戸数から農工商の戸数を差引いた残り172軒がそれにあたると考えられます)。このように、農民よりも工商の町人や武士のほうが多く住んでいる所は明らかに町とよべます。町のように経済力のある所でない、山車を出すような祭の維持は困難です。今日、曳山行事が行なわれている所は、たいてい江戸時代に都市であったり、近江商人の出身地など、祭を維持する経済力をそなえていた所です。

### 祭の準備

大溝祭はどのようにして行なわれるか、祭の行事次第を、祭の準備から順にみることにします。

祭を行なうにあたって、まず神事寄りということが行なわれます。これは祭礼のほぼ半月前、4月20日頃に氏子総代や各組の組長ら役員が寄って、今年の祭はどのように行なう

か、とりきめをします。とくに国道161号線が町内を通過していて、近年は交通量も多く、道路幅が狭いため、交通遮断をしないと祭を行なえない事情にあります。そのうえ、1つの山車を除いて、ほかはすべて山蔵が国道に面しています。ですから山車の巡路や通行時間などの決定については警察の規制を受けますが、このことも神事寄りです。役員たちにはかかりません。

5月3日は幟立て<sup>のぼりたて</sup>とあって、各組の青年会が日吉神社や御旅所に幟を立てます。いよいよ明日から祭をすることを内外の人びとに示すのです。このとき湊組だけは御旅所に幟を立て、ほかの4組は神社に立てることになっていて、山車の曳初め、つまり試運転もこの日に行ないません。5月8日に祭をしていた頃は5月4日が曳初めであったのですが、本祭が5月5日になってからはこの日となりました。また、神輿<sup>かみこ</sup>は町組が順番に昇<sup>のぼ</sup>ることになっていますが、その当番にあたった町を渡番町といい、御旅所の清掃を行ないません。宮元町(榎組)は神社に近い所にあり、神の世話をするので、祭ではほかの町組より格が高いと考えられています。この町は4日朝から神輿や剣鉾・傘鉾を出し、祭の前に境内の清掃などもしておきます。4日昼前には神輿に湯立て神事も行なわれます。

### 宵山巡行

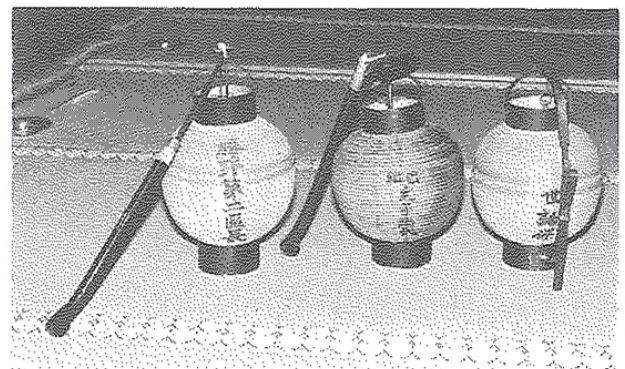
5月4日は宵山です。日本人の神観念では、夜は神や死霊などの活躍する世界であり、明るい昼間はわれわれ人間の活動する時間であると考えられていたようで、古い祭は日没とともに始まることが多いです。

午後7時、神社で宵宮祭が行なわれます。区長をはじめ神社の役員、各組長らが、紋付羽織袴に白足袋をはき、定められた提灯をもって参ります。宮元の人たちだけは1戸に1人ずつ出て拝殿の神輿の脇に参列し、二百灯とあって200の灯明を奉納します。式典のあと社務所で神前協議が行なわれます。これは

明日の本祭の最終確認ともいえるべきもので、雨天の場合の打合せなどもします。複数の町や村(大字)がいっしょに祭をするときは、行き違いが生じやすく争いのもととなるので、よくこういった会議がもたれます。今日まで祭を長く継続してくる間に生み出した、生活の知恵といえるでしょう。異議がなければ前に決めたとおりということで会議はすぐに終わり、各組長は神輿昇きの名簿(渡番以外の町からも神輿昇きを出す)を提出して、直会にうつります。直会は渡番の組長3人が給仕となり、神供のゴク(赤飯)・エビ(川のもの)・ザコ(海のもの)を組ごとに給仕の机まで進み出て懐紙に受け、自席に戻って食べます。宮司からは本祭に使用する草履(白紙を鼻緒に巻いた)と日の丸の扇子をもらって解散します。宮元の人たちは毎年3人ずつ交替で、終夜神輿の警護にあたります。



神前協議のあと宵宮祭の直会



区長(左)、氏子総代(中)、世話係(右)のもつ提灯

一方、山組の町では宵山巡行が行なわれています。夕刻5時すぎ山蔵を出て、7時30分に中町へ集合、8時に巡行に出発し、10時解



宵山巡行する曳山

散して自町へ帰ることになっています。曳山は龍・湊・巴・宝・勇と組の名称がついています。宵宮にはこれらの名を書いた提灯を曳山の周囲に何段にもつけ、中では囃子を演奏しながら春の宵をゆっくりと行くさまは何ともいえない風情があるものです。曳山は5基がそろって各山組の町を順にまわりますが、家々では曳山が来るのを待っていて御神酒を1升2升と献酒します。大人たちは、宵山を若い衆の祭だから、一晩曳山は青年会に貸していると考えていて、少々蛇行したり暴走してもゆるします。夜のうちに思いきり山車を曳きまわさせ若いエネルギーを発散させてや



新しく嫁をもらった家で、ごちそうになる若い衆

り、本祭では定めに従って静かに社参することをねらったのかもしれませんが。献酒も若い衆のもので、1山車に60本ほども集まって、祭がすむと町の人に1本1,000円で売り、青年会の旅行費用のたしにするといいます。宵山の曳山巡路は、中町を出発して西町を通り、総門の前で一時的に止まり、囃子を聞かせ車軸に油を注ぐなどして休憩をします。次に江戸屋町

から長刀町へ行き、そこでも休憩し、西本町、北本町を通って新町のはずれで休憩し、そこで解散します。自町に帰った曳山は提灯をはずし、ひとまず山蔵に納められます。

宵山の夜はどの家も軒の提灯の火を朝方までつけておきます。もし消えたのを知らずにいると、昔は若い衆が来て太鼓をたたき、家の人起きて火をつけるまで続けたといえます。また、組長宅や新しく嫁をもらった家、新築した家など、祝い事のあった家へは若い衆が祝福におしかけていきます。かどぐちで太鼓をたたいて家人に知らせ、上にあがってごちそうをよばれ、おめでたのおすそわけにあずかります。

## 本 祭

5月5日は本祭です。神社では例大祭の儀式が執り行なわれ、区長・責任役員・氏子総代・各組の神社系の組長らが参列します。一方、山組の町内では9時半頃に山蔵から山車を曳出し、総門の前に集合します。総門は藩主分部氏が城下の区画を行なうにあたって、廓内（武家屋敷）と町人街に別けた出入口です。ここに山車を勢揃いさせて、殿様や家臣たちに見てもらおうと同時に、町人たちは各町

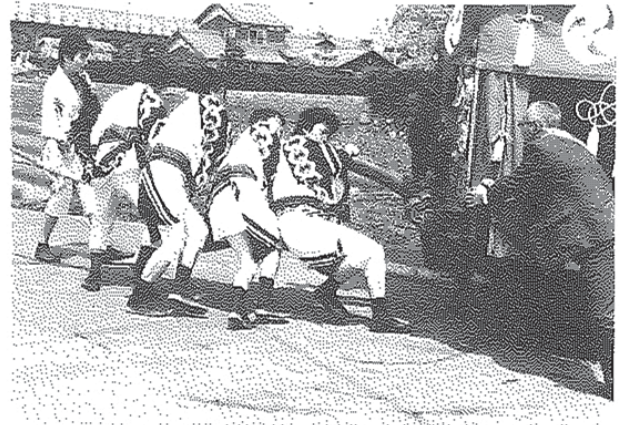
たがいに山車の荘厳を競い、実力を示したものと思われま。また、祭礼のようなハレの日は、平常の単調な毎日にアクセントをつけるものですから、祭の中に競争がみられます。ここでも各町の山車の立派さを比べ、<sup>はやし</sup>囃子の上手下手を競います。ですから、総門前では各山車ともっておきの囃子をはやします。

午前10時、総門前を出発し日吉神社へ向かいます。出発のとき、山付きの組長が次の山車の組長へ「これから出かけますからよろしく」などと挨拶をします。このような礼儀は祭では尊重されます。先頭の曳山をハナヤマ（端山）といい、これには柳の御幣・紅白の鏡餅・神酒とを積み、俗に殿様の曳山といわれる巴組の山車には神酒が乗せられます。山車の上部を上山、下部を下山とよびますが、上山には白幣を立て、囃子方は下山に乗っています。上山には神が乗っておられると意識され、下山の囃子で遊ばれながら氏子の町をめぐっていくのです。曳山の前後は青年会の若い衆がかため、方向転換や車軸に油をさします。方向転換は山車の前後につけたテコ（樁の幹）をマエテコ・ウシロテコそれぞれ4、5人のテコトリが力をあわせて行ないます。2本の曳き綱は中老や各家から1人ずつ出た人が曳き、綱の先は2人の組長がもちます。

神社に着くと宮元の人たちが出迎え、曳山はハナヤマから順に奥へ並びます。神輿<sup>みこ</sup>昇きを差配する、宰領と副宰領とは昔からの神輿昇きの装束をして、社務所<sup>はな</sup>で袈裟<sup>きん</sup>繻<sup>す</sup>をもらい、渡番の組長より御神酒・御神供をいただきます。続いて神輿昇きの中老や若い衆も同様に御神酒などをいただきます。このあと宰領は神輿昇きを集めて挨拶をし、神輿昇きは石段を一気に駆け登って、拝殿に安置した神輿をかつぎ出し、組長たちが昨夜もらった扇子で



山蔵から曳き出される山車



力を合わせ曳山の方向転換するテコトリ

招くのに応じて拝殿のまわりを3周します。そして、石段を下ったところで神輿の屋根にウノトリ（鳳凰）をつけ、神を移し入れます。神輿は内側の鳥居を出て外の鳥居まで、曳山の前を通りすぎ3往復練ります。

現在は道路事情で御旅所までの渡御は自動車で行なわれ、神輿もトラックに積まれます。曳山は神社で曳き別れとなり、囃子方は上山に移り下山には子供たちが乗って、それぞれの町へ帰ります。以前は山車の町まで戻ってきて、一年交替で巴組と宝組の前へ並び、万歳をしてから曳き別れをしたといひます。

#### 町組と囃子

曳山は5基あり、町組は次のとおりです。龍組は中町と西町、湊組は勝野、巴組は南本町、宝組は北本町、勇組は新町といった具合

です。各町はさらに小さな江戸屋町・長刀町・六軒町などといった町からなりたっています。

囃子は厳密には曳山ごとに異なるといい、同じ囃子でも山車によってよび名が違うこともあります。そして時機によって吹く曲を変えます。例えば、宝組のレパートリーは、ピーソング・新囃子・四車・上り馬場・下り馬場・祇園囃子・コンの舞・ホッピキタイタ・ホータリコイタの9曲で、ほかに廃曲となった丸屋・竹すずめというのがありました。最初のピーソングは初心者に教える曲、新囃子にのって山蔵から曳き出し、総門前ではとっておきの四車を聞かせ、神社への往復には上り馬場・下り馬場をならし、それ以外の曲は町内をまわるときなどに吹くといえます。昔は囃子が聞こえてくると、どの町の曳山が来たか家の中にいてもわかったそうですが、今ではそのようなことも少なくなりました。

囃子方は、笛5、6人、鉦2、3人、締め太鼓1人といった構成です。交替要員を含め山車によって多少の人数の変動はあります。楽器は人の得手により好きなのを選ばせます。青年会は13歳からですが、今は人が少ないので囃子方は12~25歳の男子です。昔は惣領（跡取り）だけしか加われず、上達するためよその町へ良い曲を盗みに行って練習したとい

います。

### 祭のうつりかわり

巴組には御祭礼一式留記という、宝永元年(1704)以来の祭礼の記録が保存されています。これによると、享保5年(1720)の祭礼入用に「すす木山出ス」、翌6年には「殺生石山出ス」、享保9年には「えんの行者出ス」などとあり、大津祭などのように、かつては故事にちなんだ造り物を山車の上に飾っていたのかもしれませんが。そして、役行者山の出た享保9年の祭礼入用の中に「壺奴 人形衣かりちん」とあり、これが造り物の借衣装のことであるならば、造り物は毎年趣向を変えたものか、造らない年があったものと推測されます。いずれにせよ、江戸中期には曳山の上に造り物を飾ったことがあり、現在のような形に定着するまでにいろいろと変遷があったといえます。

祭日についても変遷がありました。祭日は元来4月1日でした。それが明治6年から大陽暦に変わり、この年は旧暦の4月1日にあたる新暦5月16日に行なわれました。以後祭日は旧暦4月1日でしたが、明治22年からは、この年の旧暦4月1日が5月8日であったので、以後、5月8日を祭日としました。さらに5月5日が国民の祝日となったので、昭和36年から祭日を5月5日に再度変更して現在に至っています。（長谷川 嘉和氏 提供）



神輿昇きの宰領と副宰領、昔の神輿昇きの姿



拝殿の周りをまわる神輿